第１３回北海道大学獣医学部同窓会フォーラム

「国際共修、多文化間共修環境の先進部局として」

日時：令和６年９月２８日（土）14:30-16:15
場所：獣医学研究院講堂
方法：対面開催（遠方からの参加者は Webex Meetings を活用）

https://hokudai.webex.com/hokudai/j.php?MTID=mdc003eb97772e973a6b657bd29cc327f
ミーティングコード：2518 242 3193
パスワード: vet0928

趣旨説明： R6 庶務担当　堀内　基広（S61 卒）

【学部における国際共修、多文化共修】

1. タイ・チュラロンコン大学/カセサート大学派遣・受入
   担当教員から：野中　成晃　先生（S60 卒）（5 分）
   派遣学生から：獣医学部５年　阿部 栞里（８分）
   派遣学生から：前園　佳祐　先生（R3 卒）（８分）

2. 英国・エジンバラ大学派遣・受入
   担当教員から：坪田　敏男　先生（S58 卒）（5 分）
   派遣学生から：獣医学部６年　井上　祐人（８分）

3. ザンビア・ザンビア大学派遣
   担当教員から：村田　史郎　先生（H16 卒）（5 分）
   派遣学生から：獣医学部５年　後藤　美空　（８分）

【大学院における国際共修、多文化共修】

担当教員から：堀内　基広　先生（S61 卒）（5 分）
SaSSOH Student Committee：国際感染症学院　D3　川口　虹穂（10 分）
多様な海外活動：国際感染症学院Ｄ４　有泉　拓馬（R3 卒）（10 分）

第１３回北海道大学獣医学部同窓会フォーラム
「国際共修、多文化間共修環境の先進部局として」

大学の国際化、グローバル人材の育成など、大学が目指す方向性の一つとして重要視されています。大学には海外大学との学術交流協定の締結と交流事業の実質化、国際共同研究の推進、留学生の受け入れ、あるいは、学生の海外派遣など様々な取り組みが求められています。このような国際活動の継続は、我が国の大学の国際競争力の強化、ひいては、日本の国際競争力の強化に繋がると期待されています。一方で、大学における実質的な国際活動は、一朝一夕に推進できるものではなく、当該部局や教職員の信念と熱意による継続的な取り組み、信頼できる海外カウンターパートの存在、なによりも、互尊の精神を土台として双方がその有益性を享受できる環境の構築が必要です。

北海道大学は「国際性の涵養」を教育理念の一つに掲げています。中でも獣医学部は、ザンビア大学獣医学部設置への協力以降、半世紀におよぶザンビアとの連携、エジンバラ大学との学生相互派遣を伴う交流、大学の世界展開力に端を発するタイ獣医系大学との単位認定を伴う学部学生の相互派遣、JICA 技術協力プロジェクト、あるいは地球規模課題対応国際科学技術協力プログラムの実施など、多くの国際活動を実施しています。大学院教育でも、教育の完全英語化、海外インターンシップの導入、その他学生の国際活動の支援など、北大のグッドプラクティスとなる多くの国際的な活動を実施しています。

昨今、大学のグローバル化の方向性を示す言葉として「国際共修」、「多文化間共修」を耳にする機会が多くなっています。留学生と日本人学生が共に共通課題に取り組む「多文化間共修」、文化や言語の異なる学生が、グループワークやプロジェクト等での協働学習体験を通して、実質的な交流により相互理解を深める「国際共修」、ともに、獣医学部、および、獣医学院・国際感染症学院では、新しいものではなく、当たり前のように実践しています。同窓兄姉から受け継がれてきた「国際感覚の涵養」、「国際社会への貢献」、「グローバルに活躍できる人材の育成」などの意識が、学部・大学院の潜在意識としてインプリントされており、社会の趨勢に流されることなく、地に足の着いた国際活動を継続しており、北大の国際共修、多文化間共修環境の先進部局として、ロールモデルとなる取り組みを進めています。

フォーラムでは、国際的な活動のグッドプラクティスとして、学部学生の海外派遣を伴う「国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム(IVEP)」、および、北大全体の大学院教育改革のロールモデルとなる卓越大学院プログラム「One Health フロンティア卓越大学院プログラム」における「国際共修、多文化間共修環境」の実例を、その活動を経験した学生が紹介して同窓兄姉と共有いたします。今後の「国際共修、多文化間共修」の推進について、高所からご指導ご鞭撻いただく機会となれば幸いです。

タイ・チュラロンコン大学/カセサート大学派遣・受入

タイ・チュラロンコン大学/カセサート大学との学生交流

獣医学研究院・教授　野中 成晃（S60 卒）

タイでは同国の獣医学教育をリードするカセサート大学およびチュラロンコン大学の 2 校と学生交流を実施してきた。カセサート大学との交流は、大学の世界展開力強化事業により 2013 年に開始した。東京大学、酪農学園大学と連携して単位互換制の Asia International Mobility for Students（AIMS） Program に参加し、数ヶ月間の留学プログラムを相互提供してきた。一方、チュラロンコン大学との交流は 2018 年に受入を実施し、2019 年に相互受入を開始した。残念ながら 2020-2021 年は COVID-19 の流行で派遣・受入を中止せざるを得なかったが、この間のコロナ禍でもオンラインでの交流を継続した。現在もカセサート大学とは約２ヶ月間、チュラロンコン大学とは約１ヶ月間の研修プログラムを設定し、それぞれの大学と年間３-５名の派遣と４-６名の受入を実施している。

チュラロンコン大学の生徒から得たもの

学部 5 年　阿部　栞里

私は今年の春、タイのチュラロンコン大学へ実習に行きました。約 3 週間様々な診療科を見させていただき、海外と日本の教育文化の違いや、診療の違いなど様々なカルチャーショックを受けました。例えば診療科の数や種類の違い、来る動物の種類などです。それと同時に、校外学習や放課後のカラオケに誘ってくれるタイの学生たちのフレンドリーさや親切さは日本の友達に通ずるところもありました。また、同じ獣医学生でも志や考え方が似ているところと異なっているところがありました。今回の実習は先生の付き添いがなく、学生のみでの実習だったため、すぐに助けてくれる日本人はいませんでした。そのため、何度か困難に直面することもありましたが、自力で解決する力をつけられたと思います。

タイ・カセサート大学への派遣を終えて

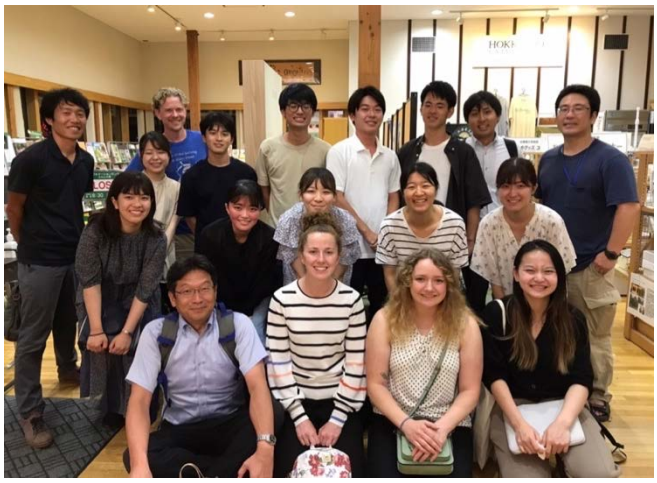
獣医学研究院・助教　前園　佳祐　（R3 卒）

私は学部 5 年次（2019 年度）に、タイのカセサート大学への派遣プログラムに参加しました。本プログラムでは約 7 週間にわたり、産業動物、野生動物、水生動物等の多様な動物種に関連する獣医療について学びました。滞在中は、現地の学生とともに 10 人ほどの小グループに編成され、当大学で行われている正規の実習に参加しました。実習では、教員から助言を受ける場面もありましたが、多くの場合、学生が主体となって診断から治療までのプロセスを進めなければならず、グループ内で密な交流や議論を行う機会が多くありました。このような実習を通して、異なるバックグラウンドを持つ国際的な集団の中で、他者と協働し、主体的に課題を解決する姿勢が身についたと感じております。こうした姿勢は、研究活動を進める上でも重要であり、博士課程在籍中や教員となった現在でも大いに役立っていると感じています。本フォーラムでは、実際の実習内容を交えながら、カセサート大学での体験について当時の記憶を振り返りつつご紹介したいと思います。

英国・エジンバラ大学派遣・受入

学部における国際共修：英国エジンバラ大学派遣と受入
獣医学研究院・教授　坪田　敏男（S58 卒）

平成 21 年以降ほぼ毎年、英国エジンバラ大学との学生交流を継続してきました。エジンバラ大学は大学ランキングで常に世界ランク 30 位以内を堅持しています。現在は、エジンバラ大学より 5 名の学生を受入れ、旭山動物園、知床国立公園、標津サーモンパーク、釧路湿原野生生物保護センター、帯広畜産大学などで実習・見学を含めた研修を行っています。一方、北大から学生 5 名（3〜6 年）をエジンバラ大学に派遣し、小動物、大動物およびエキゾチック動物の臨床実習、動物園学の講義と見学などを行っていただいています。どちらも研修期間中に、野生動物医学／保全医学あるいは One Health に関するシンポジウムを開催しています。参加学生からの発表も組み入れ、英語による発表のトレーニングの良い機会になっています。平成 30 年度からは「国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム」の中で派遣・受入双方向の国際共同教育プログラムを継続しています。



2023 エジンバラ大学派遣報告
学部 6 年　井上　祐人

エジンバラ大学派遣プログラムは①アニマルウェルフェア、②環境保全、③伴侶動物診療の 3 つに分けることができる。①与えられたトピックについて行ったプレゼンでは発表するだけでなく教員や学生とディスカッションを行い、養豚場や動物園ではウェルフェアを指標に応じて数値化し、客観的・科学的に論じるレクチャーを受けた。②農薬による水の汚染や異常気象による降水量減少など日本と共通する課題や農地化により減少した森林の再生など、今日の日本とは異なる現状に対する取り組みをハイキングやカヌー体験といったレクリエーションを通じて学んだ。③建物・マンパワー・設備の大きさという面で特に北大との違いを感じた内容で、両大学の強みや相違点を見つけることができた。その他、学外にて伝統的な建造物や食事、現地教員や学生との交流を通じて異文化を体験し、本プログラムに参加することで新しい価値観と獣医学に関するさらなるモチベーションを得ることができた。

ザンビア・ザンビア大学派遣

北大獣医学部とザンビア大学獣医学部との連携
獣医学研究院・准教授 村田　史郎（H16 卒）

北海道大学獣医学部とザンビア大学獣医学部は、約 40 年の交流の歴史を持ちます。日本政府の協力によってザンビア大学に建設された獣医学部への教育支援に始まり、JICA によるザンビア大学獣医学部への獣医学教育普及プロジェクト、文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）による学生交流プログラム、日本学術振興会研究拠点形成事業や地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）による環境毒性に関する研究コンソーシアム形成・人材育成など、強い結びつきを発展させてきました。現在も日本学術振興会世界展開力強化事業による大学院生を対象とした国際的な保全医学教育交流プログラムや、国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム（IVEP）により、日本に存在しない疾病や野生動物に関する教育を学部学生を対象に行っており、双方向的な人的交流による獣医学教育の発展・充実に取り組んでいます。

ザンビア大学派遣報告
学部 5 年 後藤　美空

2024 年 8 月、私たち 4 人は IVEP プログラムを通してザンビアを訪れました。滞在は 2 週間と短いものでしたが、ザンビア大学での講義や実習に加え、と畜場や農場の見学、さらには国立公園を探索する機会もありました。講義では現地の感染症や文化的背景との関わりを理解し、と畜場や農場の見学では水不足や社会システムの不備、それらに対する JICA の介入など現地の問題を目の当たりにし認識を深めました。国立公園では、普段は出会うことのない数多の野生動物を間近で観察し感動するとともに、生態系の保全の重要性を実感しました。学問的な学び以外にも、学生との交流会やサンデーマーケット訪問等において現地語を用いた会話を積極的に行い、ザンビア人の穏やかさ、親しみやすさを含め文化的な学びも十分に達成しました。今回の派遣を通じて、国際的な視野を広げるとともに、ザンビアにおける獣医師の役割と地域の背景を深く理解する貴重な機会となりました。

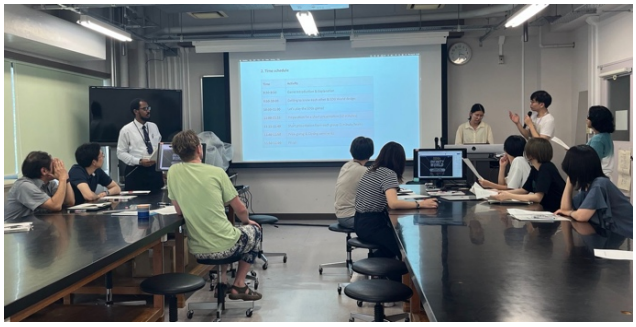
大学院における国際共修、多文化共修

国際共修、多文化共修を実践する大学院教育
獣医学研究院・教授 堀内　基広（S61 卒）

最近「国際共修、多文化共修」が、大学教育改革のキーワードの一つに使われていますが、獣医学研究院、獣医学院、国際感染症学院は、当たり前のように、国際共修、多文化共修環境で大学院教育を進めています。博士課程教育リーディングプログラム、卓越大学院プログラム等の大学院教育改革プログラム、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムなど国際的な活動を多分に含むプログラムの推進、JICA との連携などにより、令和 6 年 5 月現在、大学院生の約半数が留学生、24 国籍の学生が、実質的な共修環境で、修学・研究活動に取り組んでいます。Global Leaders Workshop、WISE/LP セミナー、Student Monthly Progress Meeting などの多文化共修環境、海外インターンシップなどの海外活動を含む大学院プログラムは、北大の大学院教育改革のロールモデルとなる取り組みとなっています。

多様性の尊重から生まれる創造性
国際感染症学院 D3　川口　虹穂

私は北海道大学が運営する国際学会(Sapporo Summer Symposium for One Healh : SaSSOH)の学生企画委員となり、留学生と共に参加者の SDGs に対する意識の向上を目的としたゲームを企画しました。ゲーム作成時に私は単純なクイズ大会を考えましたが、留学生からは仮想の時間爆弾ゲームといった様々な案が出されました。当初考えがまとまらず話し合いが難航しましたが、私は自身が考えつきもしなかったゲーム案に魅力を感じ、個々が出したアイディアを掛け合わせることで最終的に唯一無二の SDGs ウェブサイトゲームを作成することができました。17 個の SDGs の目標に関連したゲーム考案、ウェブサイト作成、得点の計算など困難なことが多々ありましたが、タイ人の留学生を中心に皆で協力してゲームを作成することができました。私は留学生のバイタリティに感銘を受けるとともに、オープンマインドな姿勢で自身とは異なる考えを受け入れ、組み合わせていくことで新しいアイデアが生まれる楽しさを実感しました。



大学院プログラムにおける海外活動
国際感染症学院 D4　有泉　拓馬　（R3 卒）

発表者が所属する国際感染症学院では、感染症学に関する海外の機関でのインターンシップ活動が必修科目となっています。本発表ではフランスの国立研究機関である Institut de Recherche pour le Développement (IRD)で実施した研究実習活動について報告いたします。発表者は節足動物媒介性ウイルス（アルボウイルス）の研究をする中で、媒介動物（ベクター）とウイルスとの相互作用に関心を持ち、生きた蚊を用いた実験技術を身につけたいと考えました。IRD では感染症学だけでなく昆虫学、環境学など様々なバックグラウンドを持った研究者が蚊をはじめとした節足動物に関する研究を実施しています。そこで、約 3 ヶ月間 IRD に所属し、”蚊のラボコロニーの管理”、”蚊の唾液腺、中腸、卵巣の採取”、”蚊の唾液採取”、”蚊へのウイルス感染実験”、”ウイルス感染蚊を用いたマウス感染実験”を学びました。発表者は本活動を通して新たな知識や実験技術に加え、文化や環境の違いを受け入れ、適応する力が身につきました。